

# 平成 2 1 年度病虫害発生予察特殊報第 3 号

平成 2 1 年 5 月 2 0 日  
愛 知 県

- 1 病虫害名：キククロロティックモットル病（仮称）  
(*Chrysanthemum chlorotic mottle viroid*, CChMVd)
- 2 発生物種：キク
- 3 発生地域：東三河地域
- 4 発生確認の経過  
平成20年9月、東三河のキク栽培ほ場において、葉の一部が黄変する症状が発生した。農業総合試験場病虫害防除グループにおいて、ミスルトー（感受性キク品種）を用いてカーボランダム法で汁液接種したところ、退緑、黄斑症状が現れた。その後、RT-PCR法によって検定した結果、*Chrysanthemum chlorotic mottle viroid* (CChMVd) に特異的なバンドがみられた。  
さらに、遺伝子の分析としてシークエンシングした結果、約400の塩基の96.9%がCChMVdと一致しており、キククロロティックモットル病（仮称）と診断した。なお、発生したキクは、CChMVd単独感染であった。  
キククロロティックモットル病は昭和42年アメリカで発見された病気で、日本国内では、平成16年、秋田県の小ギク（品種：七夕まつり）で初めて確認されたが、本県では初確認である。
- 5 病徴  
単独感染の場合は病徴を示さないことが多いが、小ギク（葉脈沿いの退緑症状）とスプレーギク（株全体の退緑症状）では病徴が認められた事例があり、下葉に退緑、黄斑症状が現れた後に、上葉に進展する。また、CChMVdによる症状は、品種や他のウイルスやウイロイドとの重複感染により大きく異なるとされている。
- 6 病原ウイロイドと伝染  
CChMVdは、398～399の塩基で構成されている環状の一本鎖 RNA。塩基配列相同性に基づいた分類によると、*Avsunviroidae* に属し、葉緑体内で増殖するとされている。  
伝染は、接触（汁液）伝染のみで、土壌伝染、虫媒伝染はしない。
- 7 防除対策  
・無病苗を利用する。  
・葉のこすれあいや、感染株を作業したハサミ等の刃物に付着した汁液により感染するので、摘蕾や切り花作業時の接触伝染、刃物を介した伝染を防ぐ。  
・発病株は抜き取り、適切に処分する。
- 8 連絡先  
農業総合試験場環境基盤研究部病虫害防除グループ  
電話 0561-62-0085 内線471



図 1 CChMVdに感染したキクの葉



図 2 RT-PCRで得られた産物の電気泳動写真（CChMVdの検定結果）  
M：1 kb マーカー                   ：発病葉  
右端に写っているバンドが増幅された産物